

天文教育 5

2020

Japanese Society for Education and Popularization of Astronomy



〈集中連載〉国際教員研修プログラム NASE

〈投稿〉清少納言が見た七夕の星空／簡易四分儀を用いた理科と数
学科での教科間連携を図った授業実践／太陽物理の国際会議のア
ウトリーチセッションで、人生初の招待講演に呼ばれてみた。／
日本天文遺産となった「明月記」／児童がプラネタリウムの解説
員になった1日

本誌原稿募集のお知らせ

編集部では下記の原稿を募集しております。会員の皆様からの活発なご投稿をお待ちしております。

1. **原著論文**：天文学教育・普及について、オリジナル性があり考察が優れ、学術論文として主な内容が印刷発表されていないもの。表題、アブストラクトには英文も付けてください。
2. **解説記事**：天文学や天文教育・普及に関する解説・紹介記事。分量は刷り上がりで6～10ページ程度。
3. **各種の報告など**：支部会やワーキンググループの活動報告、各種のイベントの報告、また天文教育・普及に関する授業の実践例など。分量は刷り上がりで2～4ページ程度。
4. **書評**：天文学や天文教育・普及に関する書籍の紹介。分量は刷り上がりで1ページ程度。
5. **会員の声**：会員の皆様からのご意見・ご感想など。分量は刷り上がりで1ページ程度。
6. **表紙の写真**：タイトルと400字以内の「表紙の言葉」とともにご投稿ください（写真のみでも構いません）。
7. **情報コーナー（各種会合・イベントの告知など）**：支部会やワーキンググループの会合、また天文学に関する各種の会合・イベントなどの情報。分量は任意ですが、スペースの関係で適宜省略させていただく場合があります。会合・イベントの開催日と会誌の発行日（奇数月下旬）にご留意ください。

・ **締め切り**は1は原則として奇数月末日、2～7は偶数月15日。投稿先は post@tenkyo.net です。

・ **広告掲載**を希望される方は事務局 (jimu@tenkyo.net) までお申込みください（申込締切：偶数月15日）。掲載料：B5判1ページ ¥20,000-、半ページ ¥12,000-、1/4ページ ¥7,000-、チラシの折込み ¥20,000-。

※本誌に掲載された記事は、当会 Web サイト (<https://tenkyo.net/>) にて PDF ファイルの形で公開を予定しております。インターネットでの公開に差し障りのある場合は、ご投稿の際にその旨ご連絡をお願いいたします。

なお、2014年9月号から、当会会員に対しては会誌発行後に速やかに、パスワード制限をかけた形で閲覧できるようにし、発行から1年経過後にパスワード制限を解除して、広く一般に公開いたします。

【編集委員会からのお願い】

『天文教育』の編集は、すべて会員からなる編集委員によって行なわれています。ご投稿の際には以下の点についてご協力いただけますよう宜しくお願いいたします。

- ・ 原稿の投稿は、原則として Microsoft Word ファイルでお願いします。
- ・ 執筆用のテンプレートがホームページ (<https://tenkyo.net/>) からダウンロードできます。できるだけこのテンプレートをご利用くださるようお願いいたします（執筆上の留意点なども記しています）。
- ・ 十分に推敲を重ねた完全原稿でご提出ください。分量や内容によっては手直しいただく場合もあります。
- ・ 提出データは必ず各自でバックアップしておいてください。
- ・ Word 以外に一太郎ファイルやテキストファイルでも受け付けております。
- ・ 原稿のご投稿やご質問は電子メールにて、下記のアドレスへお願いいたします。

投稿先・質問先 メールアドレス：post@tenkyo.net

表紙の言葉

星空への思い

2020年4月28日21時49分から1時間、Canon EOS5D Mk III 15mm F2.8 EX DG DIAGONAL FISHEYE 水中（長野県高山村）。撮影者：大西浩次

信州の春は突然やってくる。特に雪の多い北信地域では、雪解けと同時に芽吹きが始まり、次々と花が咲き誇る。今年は暖冬だが4月に積雪や寒い日があったためだろうか、里山のしだれ桜は、例年と同じ時期の開花となった。ここは、長野県高山村の水中、今から278年前、寛保2年（1742年）の大水害の後に小さなお堂と共に植えられた桜の木である。この水中の桜、ほとんど無名だったが、昔から地元の人々から愛され、私も毎年眺めに来ていた。しかし、2005年の吉永小百合主演映画「北の零年」の冒

頭のシーンに採用されると、昼夜を問わず多くの人が訪れるようになり、静かに桜のもとで星空を眺めることも出来なくなっていた。

ところが、いま、新型コロナウイルス感染症のパンデミック状態にあり、政府の緊急事態宣言のもと、長期の自粛生活が強いられている。こんな中、訪れてみると誰もいない。星空を見上げていると、あっという間に1時間が経ってしまった。こんな時でも、自然は着実に時を刻み、動植物たちが目覚め、天空は春から初夏の星空を迎えようとしていた。感染症が収束するまで、まだまだ、長い月日が必要だろう。少しでも早く、安心して星空が見上げられる事を祈念しながら撮影した。名残惜しいけど、このショットで帰宅となった。

（大西浩次）